様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１５１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２０１９１

研究課題名（和文）浄土真宗と和歌―真宗仏光寺派と桂園派の関係を中心として―

研究課題名（英文）Jodo Shinshu Sect and Waka Poems:Focusing on Relationship between the Bukko-ji School of Jodo Shinshu Sect and the Keien School

研究代表者
田中　仁（TANAKA, Hitoshi）

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：８０２１７０６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,200,000円、（間接経費）　960,000円

研究成果の概要（和文）：　佛光寺と佛光寺派寺院の所蔵資料を調査し、香川景樹の創始した桂園派の隆盛は、真宗佛光寺派の僧侶や門徒の間に景樹の歌論・和歌が流布したことに大きい理由があることを確かめた。
　また、佛光寺派をはじめとする真宗の寺院や門徒の家に伝わる資料、種々の親鸞伝等を調査し、その成果に基づいて次の事実を明らかにした。江戸幕府の寺院統制の一環として浄土真宗各派の本山が准門跡に列せられたのと同じ十七世紀中頃、民衆の間では、親鸞が公家の出身であったことや和歌の名手であったことが強調されるようになり、そのような親鸞像が、佛光寺派と桂園派の密接な結びつきを可能にした。

研究成果の概要（英文）：Through investigation of the archival documents owned by Bukko-ji and temples of the Bukko-ji school, it wasu confirmed that the reason of the prosperity of the Keien school initiated by Kageki Kagawa was largely attributed to the dissemination of the Kageki`s essays on waka poetry and waka poems among priest and followers of the Bukkou-ji school of Shinshu sect.
Also, based on the result of the investigation on the documets passed down templs of Shinshu sects including that of the Bukko-ji school and family of followers , various biographies of Shinran and so on, following fact was revealed. In the middle of 17th century, at the same prriod when the head temple of each school of Shinshu sect was raised to associate monzeki as part of temple control policy of Edo Shognate, Shinran`s being from court nobles and expert of waka poems became emphasized among ordinary people, and such images of Shinran enabledthe intimate connection between the Bukko-ji School and the Keien School.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：国文学　近世和歌　浄土真宗　和歌　歌論　歌壇　真宗仏光寺派　桂園派

１．研究開始当初の背景

浄土真宗と文化・芸能との密接な関係については、従来注目されていなかったわけではなく、たとえば籠谷眞知子氏『真宗文化史の研究：本願寺の芸能』のような詳細な研究もある。しかし、そうしたなかで、和歌については必ずしも研究が進んでいない。土井順一氏の「古伝親鸞の和歌」以下の一連の論考も、主に親鸞その人の和歌にかかわる研究である。そこで本研究において、従来研究代表者（田中）が行ってきた仏光寺派と桂園派の関係にかかわる調査を継続しつつ、それをふまえて対象をひろく真宗と和歌に広げることを意図した。

景樹在世中の文化・文政期から没後の明治中期まで、和歌の詠作と歌論において和歌史を主導した主要な流派でありつづけた。また、文化・文政は和歌がまさに日本の津々浦々まで浸透しはじめた時代であったが、景樹と桂園派は冷泉為村をはじめとする冷泉家、加納諸平と柿園派、本居宣長・大平と鈴屋派等と並んでその一翼を担っていた。そうした桂園派隆盛の基盤の一つになったのが、仏光寺派の僧侶、門徒とその関係者によって形作られている文化圏だったのではないか―。

このような見通しを確かめるべく研究代表者（田中）は本山仏光寺所蔵和歌資料などを調査し、「仏光寺御日記の香川景樹」、「柏原正寿尼と常楽寺恵岳」などの報告を行ってきた。これによって仏光寺・仏光寺派と景樹・桂園派との密接な関係が徐々に明らかになってきたし、桂園派の形成、展開には真宗仏光寺派の寄与があったこともわかってきたと思う。

しかし、一方で、景樹・桂園派と仏光寺・仏光寺派に焦点をしぼった調査研究の限界もまた明らかになってきた。たとえば、近江の仏光寺派寺院蓮光寺の住職で景樹の門人、本山仏光寺の副講師であった理山（寛政 11 年・1799ー明治 11 年・1878）は、近江の仏光寺派寺院青蓮寺、善明寺等の住職や門徒と歌会を開いたり、また景樹の著作の貸し借りをしたりしていることが、その日記『理山日記』（蓮光寺所蔵）からわかる。また『理山日記』には景樹とその著作に関する多くの記述が見えるが、これらは真宗仏光寺派と桂園派の形成・展開の関わりの一つの具体的な形にほかならないであろう。ところが理山の活動は仏光寺派内部にとどまるものではなく、『理山日記』によると、同じ近江の大谷派寺院見瑞寺の住職で景樹の門人録に名の見える泰雅とも交流があり、その景樹入門は理山の紹介によるところであった。また、景樹の没後、その嗣子景恒は次第に本山仏光寺から遠ざけられ、やがて門主澁谷家と縁戚関係にある冷泉家の冷泉為理が仏光寺の和歌を主導していたと、仏光寺の日誌『御日記』や仏光寺所蔵和歌関係資料から推測される。さらに一例あげるなら、福井の仏光寺派寺院西雲寺の住職であった雅澄は景樹の門人であったが、その跡を継いだ春章は東本願寺の和歌師範であった赤松祐以に入門している。このように「仏光寺派交流圏」が真宗仏光寺派の僧侶・門徒のみではなく、他宗派の僧侶・門徒をも含みこむこと、仏光寺派と関わりのある和歌・歌人は桂園派に限らないことが徐々に明らかになってきた。したがって、調査研究の対象を仏光寺派と桂園派のみにしぼると、かえって仏光寺派と桂園派との関係の実態見失ってしまう可能性が大きい。

そこで、本研究を計画した。仏光寺・仏光寺派と香川景樹・桂園派との関係を中心に調査研究を進めつつ、仏光寺・仏光寺派と桂園派以外の歌人・和歌との関係にも目配りする。また景樹・桂園派と仏光寺派以外の宗派との関係も調査研究の対象から排除しない。そうすることによって、桂園派と仏光寺派との関係も正確に把握できるであろうし、結果的には「真宗と和歌との関係」というより広く普遍的な問題へと発展させることにもなると思われたのである。

２．研究の目的

（１）香川景樹は真宗仏光寺派第二十三代門主随応上人（安永三年・1774ー文政六年・1823）、二十四代門主随念上人（文化二年・1805）ー弘化二年・1845）と親交があった。そのため、多くの真宗仏光寺派の僧俗とその関係者が、香川景樹の和歌や歌論を学び、時にはその和歌や歌論を周辺の人々に教授した。このような事例を可能なかぎり多く掘りおこし、桂園派の形成・展開の過程の大きい部分を占めていることを明らかにして、「桂園派は仏光寺派やその関係者に支えられて形成され展開した」という仮説の正しさを証明する。

（２）仏光寺派のみではなく浄土真宗の諸派には和歌や歌人を受け入れる共通の要素があり、それが桂園派と真宗仏光寺派との密接な関係の基盤にあったことを明らかにする。

３．研究の方法

本研究は、本山仏光寺の日誌である『御日記』、蓮光寺理山の日記『理山日記』、洛東遺芳館所蔵和歌関係資料、香川景樹「歌日記」（『桂園遺稿』上巻・下巻　明治 40 年）を主な資料とした。また、本山仏光寺、蓮光寺以外の真宗寺院や門徒、関係者に伝えられてきた資料を発掘して資料として用いた。以下項目分けしてやや詳しく記す。

（１）『御日記』を中心とする本山仏光寺所蔵資料の調査・研究

真宗寺院のうち、主な調査対象は本研究の目的に則して本山仏光寺と仏光寺派寺院ということになる。本山仏光寺に伝来した文物は元治の兵火によって仏像仏典と『御日記』以外すべて焼失したとされてきた。しかし、実は景樹等歌人の書簡、景樹点の点取り詠草、景樹等判の歌合、景樹門人の児山紀成や菅沼斐雄の新出の著作など、かなりの数が残って

いる。それらに基づき、仏光寺派と桂園派の関係、真宗と和歌の関係について考察した。その際の参考資料としては『真宗史料集成』、『真宗人名辞典』、佐々木篤祐編『佛光寺学匠伝記と教学史料』、澁谷有教編『佛光寺辞典』のほか籠谷眞知子著『本願寺の芸能』や土井順一氏の「古伝親鸞の和歌」以下の一連の論考などを用いた。

（２）『理山日記』を中心とする真宗寺院所蔵資料の調査・研究

前記のように、本研究における主な調査対象は本山仏光寺と仏光寺派寺院ということになる。仏光寺派寺院は現在３７８ヶ寺あるが、これらのうち滋賀県南部の寺院から調査をはじめた。その理由は、一つには３７８の仏光寺派寺院のうち８５が滋賀県南部に集中しており、僧侶、門徒の交流も密であったことである。そしてもう一つのさらに大きい理由は、その密接な交流の一端が『理山日記』によってわかるということである。『理山日記』は蓮光寺住職理山（寛政 11 年・1799ー明治 10 年・1877）の日記で、現在文政７年から明治元年まで断続して２１年分が見られるが、その中に景樹やその著作に直接触れる記述が精粗合わせて１０８条、その他和歌をふくむ文化・文化人、芸能・芸能人等にふれる記述が２５０条ほどある。後者には渡辺崋山、中島棕隠、頼山陽、平田篤胤、熊谷直好などの著名人のほかに、遠近の真宗寺院ほかの寺院や門徒との交流が記されている。これらのうち、香川景樹と桂園派にかかわる記事を取り上げて、景樹と理山との交流の様、桂園派と理山との関係について考察した。また、理山が景樹の歌論をどのように受け取っていたか、景樹の歌論のどの部分に共鳴したのかについても注意した。

（３）仏光寺派以外の浄土真宗寺院所蔵資料の調査

近江国覚成寺所蔵の超然（ちょうねん。寛政４年・1793ー慶応４年・明治元年・1868）にかかわる資料の調査を行った。その方法は、理山の場合と同様に、日記から和歌に関係する記事を抄出し、超然が歌人、和歌、歌論にどのように係わったかを考察するというものである。

（４）洛東遺芳館所蔵柏原家・柏屋関係資料の調査

柏原家はその７代目当主柏原慶章とその妻延子（法名正寿尼）が香川景樹の門人で、景樹とそのほかの歌人たちの書簡 1000 通ほど、歌会や歌合の記録など、多数の和歌関係資料が洛東遺芳館に所蔵されている。そのほか、家政や経営していた柏屋にかかわる文書も残されている。柏原家は西本願寺門徒であるが、正寿尼の景樹入門を仲立ちしたのは本山仏光寺の御堂衆の常楽寺恵岳であり、上記の柏原家資料の中に仏光寺派そのほかの真宗寺院や僧侶にかかわる記録がふくまれている。これらの資料を調査し、柏原家の和歌と仏光寺派そのほかの真宗寺院、真宗僧との関係をさらに明らかにすることをめざした。

４．研究成果

本研究において調査を実施した主な資料は、（１）本山仏光寺所蔵和歌関係資料、（２）蓮光寺（仏光寺派）資料、（３）覚成寺（本願寺派）所蔵超然関係資料、（４）洛東遺芳館所蔵柏原家（本願寺派門徒）資料の４つである。以下順次その成果を略記する。

(1)本山仏光寺所蔵資料および関連資料により、仏光寺派第十九世門主随庸上人の伝記の誤りを正し、残されている詠歌を全部紹介した。伝記については仏光寺史研究の基本文献である『渋谷歴世略伝』（真宗全書所収）のいくつかの誤りを指摘し、本山仏光寺所蔵『渋谷歴世略伝』原本の調査にもとづき誤りが生じた理由を推定した。詠歌に関しては『随庸上人和歌集』ほかを翻刻し、成立年次、望月長好、二條道康などとの交流について記し、一派の門主の歌集でありながら釈教歌がほとんどないこと、その歌が「和歌らしい和歌」を作ろうという努力の産物であることを指摘した。随庸上人は明暦二年（1656）から延宝三年（1675）まで門主の職にあったが、この期間は幕府の寺院統制により仏光寺が準門跡寺院としての体制を整えていく期間と重なっており、かつ宗祖親鸞は公家の出であることが喧伝されるとともに、和歌の名手であったという伝承が流布した時期でもあった。随庸上人がいかにも和歌らしい和歌を作ろうと努めたのは、そうした時代の反映だったと見ることができる。以上、雑誌論文②の「真宗佛光寺派第十九代門主随庸上人の和歌」の摘要である。

また、本山仏光寺所蔵和歌資料の調査により、江戸幕府の寺社統治の一環として、仏光寺が准門跡寺院とされ、門主が宮廷社会の一員と位置づけられ、公家たちと交流・交際する機会がふえたことが、本山仏光寺に和歌・歌人が入るきっかけになったという推測が可能になった。これは仏光寺派だけに限られたことではなく他の真宗諸派についても同様の事情があって、浄土真宗と和歌との密接な関係を形成する要因の一つなのではないかと思われる。以上、図書①の「佛光寺と和歌」に記した。

「香川景樹添削随応上人筆当座会記」は、文化四年（1807)七月十九日、二十日に催された当座会の次第を、仏光寺派第二十三代門主随応上人が記し、香川景樹が添削したものである。この当座会は十九日に安住台（仏光寺寺内。随応上人の弟応専連枝の住居)、二十日に木村高敦、高行（仏光寺家中）宅で催された歌会であるが、そこには香川景樹をはじめとして熊谷直好、木下幸文、斧木などの桂園派関係者、随応上人・応専連枝をはじめとして義肇、恵岳などが出詠している。随応上人筆当座会記は桂園派と仏光寺派の密接な交流・交差の様を具体的にうかがうことのできる資料と考えて、景樹の添削の跡もふくめ

て全文を翻刻した。また、そこに施された景樹の添削は、和歌については語調・語勢と詠まれた状況・景物との不一致を正そうとするものであること、散文部分の添削は具体性・記録性を削除することによって、この当座会が随応上人の主宰する文化的な時空を形成していることを強調しようとするものであることを指摘した。以上、雑誌論文①の「桂園派と真宗佛光寺派の交流・交差」の概要である。

（２）『理山日記』ほかの慈照山蓮光寺所蔵資料によって、理山と香川景樹および桂園派家人たちとの交流が密であったこと、蓮光寺住職の理山が景樹の和歌、歌論にしたがって歌を詠み、景樹周辺の歌人や仏光寺派寺院の住職・門徒と歌会の開催や歌友との交流などの文事を展開していること、さらに、天保の飢饉にさいしては景樹にならって救民活動を行ったことがわかった。これは桂園派の形成・展開に、真宗仏光寺派の教団組織、交流圏が大きく寄与したこと、和歌・歌論が「文学」の枠内にとどまらない影響力を有することを具体的に示す事例である。これらのことは、雑誌論文④「『理山日記』の香川景樹」、同③の「慈照山蓮光寺所蔵資料の香川景樹」に記した。

（３）覚成寺所蔵超然関係資料を調査し、そのうち、超然の日記の一部分、『続山居余課』(超然自筆)、詩歌論集『風湾葦響』(同）等、和歌・漢詩にかかわる冊子と、書状巻のうち歌人・文人の書状を収めた一巻を調査した。日記、その他の資料ともに調査は完了していないが、超然の和歌の師は香川景樹ではなく養父の香川景柄（黄中）であることは判明した。超然は寺務・私事で上京すると、たとえば次のように、景柄を訪問し歌談に及び、また歌会を催すことしばしばであった。

　三月十三日　入京。晨発、午時着京。訪黄中老人木屋町松原上ル寮。御本山御逮夜参詣。（文政三年・1820）

　同十五日　朝黄中寓談話移晷：点取持参弐朱。（中略）黄中物語之記　一、近来古風家を唱へ六条家を蔑如する人々の歌を見るに（後略）

　同十六日　朝訪黄中老人会兼題詠出。

ただしその歌論には景柄一辺倒とは言いがたいところがあり、超然と和歌との関係についてはさらなる調査研究を必要とする。

（４）洛東遺芳館所蔵の柏原家文書により、柏原家が本願寺派の経済上の有力門徒であったこと、和歌を通じて（おそらく伴蒿蹊、香川景樹を媒介として）仏光寺派の僧俗とも交流があったことが明らかになった。歴代の当主とその家族の文事と信仰についてもいくつかの発見があったが、特記すべきは初代三右衛門、法名浅真（元禄二年・1689 没）である。柏原家の菩提寺であった発願寺の当時の住職である忍空の三右衛門追悼文（洛東遺芳館所蔵）によれば、三右衛門は、「ひたすら仏の道に趣、西方浄土に念をかけ御名をとなふるに昼夜滞なし」であった一方で、「敷島の道に心をよせあまたの和歌を詠じたまひけり」といった人物であった。忍空はこの追悼文を「うき旅の世々のつかれやわするらんうらやましくもかへる人かな」「おくれてもやかてゆかなん彼国の花のうてなにまたれんものを」という歌で締めくくっている。浄土真宗と和歌の関係を考察するうえで興味深い資料である。柏原家歴代の遺品については現在も調査を継続している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）

①<u>田中　仁</u>、桂園派と真宗佛光寺派の交流・交差―随応上人筆香川景樹点文化四年当座会記―、地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）、査読無、第 10 巻第 2 号、2013、97-128

②<u>田中　仁</u>、真宗佛光寺派第十九代門主随庸上人の和歌、地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）、査読無、第 9 巻第 2 号、2012、113-135

③<u>田中　仁</u>、慈照山蓮光寺所蔵資料の香川景樹、地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）、査読無、第 7 巻第 3 号、2011、435-460

④<u>田中　仁</u>、理山日記の香川景樹、地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）、査読無、第 6 巻第 3 号、2010、363-401

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　1　件）

①　<u>田中　仁</u>　他、法臓館、佛光寺の歴史と文化、2011、450（324-342）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　仁（TANAKA,Hitoshi）
鳥取大学・地域学部・教授
研究者番号：80217067

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：